

# 保育のヒント~「科学する心」を育てる~

# 幼虫との出合いと不思議/東京都北区立浮間保育園

キャベツの葉、ミカンの葉、様々なところで見かける幼虫に、心躍らせる子どもた ち。みなさんの園でも、そんな光景に出合うことがあることと思います。

今月の保育のヒントは、幼虫と出合い、生態の不思議さを感じたり関心をもったり する中で探求していく子どもたちの様子をご紹介いたします。



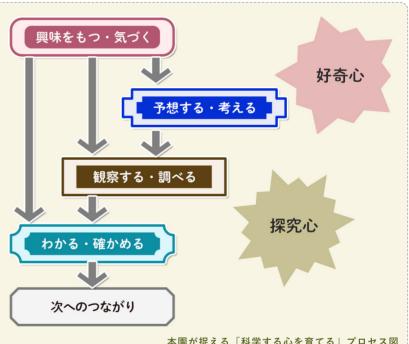
# 「幼虫の中に虫がいる」/5歳児

# 💠 本園の「科学する心を育てる」の捉え

子ども達が、遊びや生活の中で、「生き物と関わ り、生命の尊さ、自然の不思議さを感じる」ことが 科学する心につながると捉えている。

生き物に興味を持ち触れ合うことで、たくさんの気 づきが生まれ好奇心が膨らむ。子どもたちは自分た ちなりに考え、観察し、調べ、予想し、確かめてい くようになる。そのプロセスの中で好奇心・探究心 が深まっていく。

生き物を育てる、自然とかかわる中で、生命の尊 さ、不思議さを自分たちなりに感じながら、心動か される体験につながっていくものと考えている。



本園が捉える「科学する心を育てる」プロセス図

## 💠 幼虫を育てたい

5歳児の子どもたちは、アゲハやツマグロヒョウモンを育てたことから「ほかの幼虫 も育ててみたい」という気持ちが高まり、園庭で幼虫探しを始めた。キャベツの葉に いた緑の虫を、プランターごと部屋の前に持ってくる。

## 6月22日

Aさんが、「逃げちゃう。早くカゴに入れよう」と虫カゴに入れ、みんなで図鑑を広 げて育て方を調べることになった。「キャベツの葉を水に差して与えるとよい」と書 かれてあったので同じように飼育ケースで育てることにした。※小学館の図鑑 NEO 「飼育と観察」より



プランターにいた幼虫

Bさんが「おしりから糸が出ているよ」と気づく。

#### 6月23日

Bさん「モンシロチョウのうんちは四角いね」

保育者「アゲハのうんちとは違うの?」

Bさん「アゲハのうんちは丸っこかったもん」

子どもたちは幼虫だけではなく、排せつしたものにも興味・関心をもち、他の幼虫と 比較して考えるようになってきた。



幼虫のうんち

#### ❖ 幼虫の中に虫がいる

「幼虫の身体からなんか出ている」とBさんがウジ虫のような黄色い虫を見つける。

Cさん「あれは、バチだよ。図鑑にのっていたよ」

Dさん「かわいそう。あの幼虫は死んじゃうんだね」

小学館の図鑑NEO「飼育と観察」で調べると「アオムシコマユバチ」だということが わかり、子どもたちは「バチ」と呼んでいた。



図鑑で調べる様子

## 6月29日

モンシロチョウに寄生していたハチが羽化していた。

Eさん「生まれている」

保育者「どこから生まれたの?」

Eさん「これだよ。バチだから刺されると危ないよ」

## 💠 違う幼虫?

「なんか形が違う幼虫がいる」「違う虫かな」「触るとこっちはプニュプニュしているけどこっちは固いよ」図鑑で調べると違う形で硬くなっていたのはサナギだったことが分かった。触っていたらサナギが落ちてしまったので、図鑑にあるように紙の中に入れてそっと置く。

#### 6月30日

Bさんが、「生まれている」と気づく。みんなで見ていると、羽の形が変形してうまく飛べない様子。飛びやすい所へ移そうとしたが、あんまり触るとかわいそうとなった。この蝶は、サナギになった時に触って落ち、羽化したモンシロチョウだった。サナギになってから触ったり落ちたりすると、うまく成虫になれないことが分かった。



巻いた紙の中に入れたサナギ

## 羽化 (7月1日)

サナギになったモンシロチョウが羽化し、蝶になっていた。Bさんが「モンシロチョウもチョウになるときにおしっこじゃなくてうんちをするのかな?」と飼育箱にあったうんちを見てつぶやく。アゲハはサナギになる時にべちょべちょのうんちをしていたが、ツマグロヒョウモンは、蝶になる時に赤いおしっこをしていた。モンシロチョウはサナギになる時にどうだったのか確認できていない。子どもたちも自分たちが見ていないので分からない様子であった。



興味をもの

幼虫に対する興味はクラス全体に広がり、ほかの幼虫も育ててみたいという気持ちが高まり、みんなで虫探しが始まる。



キャベツの葉にいたモンシロチョウの幼虫を 見つけるが、葉はあと少ししかない。



調べる

幼虫の飼育方法を図鑑で調べ、キャベツの葉は 水にさしておくとよいことがわかる。

気づき

モンシロチョウのうんちは四角い。 アゲハのうんちは丸い。



観察 うんちの形を観察し、うんちの形に 違いがあることがわかる。

違いがあることがわかる。 うんちだけでなく排泄されるものに 関心を持っている。 た。 触るとプニョプニョしている幼虫と 硬い幼虫がいる。



調 図鑑で調べると、固い幼虫は べ る サナギだった。

サナギでも形や色など 違いがあることに気づく。 気 幼虫の中から虫が出てきた。



中から出てきた虫は寄生している 「アオムシコマユバチ」であること が図鑑で調べてわかった。 子どもたちは「バチ」と呼んでいた。

気 づ

羽化したけれど 羽が曲がって飛べない。

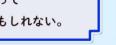


気 飼育箱の中にベチョベチョうんち づ き らしきものを発見。



「バチ」を育てるとハチになった。 やはり幼虫に寄生していたのは ハチだった。

考 サナギの時に触って え 落としたからかもしれない。





サナギを触ってしまうとうまく飛べない蝶になってしまう。触らないほうがいい。

もうすぐ羽化するかもしれない。

🍁 ふりかえり

いろいろな種類の幼虫を育てることで、子どもたちはさらに幼虫に関心を示し「育ててみたい」という気持ちが高まっていった。自分たちで育て方を図鑑で調べる姿なども見られるようになり、幼虫の色、サナギ、排せつ物など様々なものに興味を広げ、アゲハやツマグロヒョウモンと比べるなど関心は深まっていったと捉えられる。幼虫に寄生していた「バチ」の存在には驚いた様子であったが、寄生していた「バチ」も育てたいと観察するなど、生き物に対する興味や、幼虫がどんな成虫になるのか、生命の不思議さに心動かされている様子から、子どもたちの中にある「科学する心」を感じた。

無断転載を禁ず。引用する場合は右記を必ず明記願います。「(C)公益財団法人 ソニー教育財団 ソニー幼児教育支援プログラム 幼児教育保育実践サイト https://www.sony-ef.or.jp/preschool/ 」